

平成 29 年 度

人間発達科学部 人間環境システム学科

人間情報コミュニケーションコース

推 薦 入 試

小 論 文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないこと。
- 2 問題冊子は、表紙を含め全部で 11 枚、そのうち解答用紙 1 枚、問題選択調査票 1 枚、下書き用紙は 1 枚である。
試験開始の合図があってから確認すること。
なお、試験問題に文字などの印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁などがあった場合は、手を挙げて監督者に知らせること。
- 3 問題冊子に書かれている解答上の注意をよく読んで解答すること。
- 4 配布された問題冊子は、解答用紙・問題選択調査票を除き、試験終了後、持ち帰ること。

実施年月日
28.11.30
富山大学

平成 29 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース
推 薦 入 試

■ 解答上の注意

- (1) 問題①, ②, ③, ④ から3問選択して解答すること。自分の選択した問題を, 問題選択調査票に記入して提出すること。
- (2) Web で調べるものには特に制限を設けない。ただしメールやメッセージ, 掲示板, SNS などを用いて, 質問等を行ってはいけない。
- (3) ①~③の解答は横書きのワードファイルとして, デスクトップに置きなさい。① (2)で利用したエクセルファイルも同様にデスクトップに置きなさい。

ファイル名は以下のようにして保存すること。

- ①は 1-受験番号 (半角8文字)
- ②は 2-受験番号 (半角8文字)
- ③は 3-受験番号 (半角8文字)

- (4) ワードの文書作成にあたっては, それぞれのファイルとも以下の書式 (A4 版) に従うこと。

- ・ 1 行目には, 受験番号を, 中央揃え, 12 ポイント MS ゴシックで入れること。
- ・ 解答には 12 ポイント MS 明朝 (日本語), Century (英語) を用いること。
- ・ 各問題の設問について, どの設問の解答かがわかるよう, (1), (2), (3) …と分けて解答すること。各設問の解答に必要なスペースは特に指定しないが, レイアウト等を工夫すること。
- ・ 解答のために参考にしたすべてのサイトの URL の一覧を, 「参考にしたサイト」として, 各ファイルの最後にまとめて列挙すること。

- (5) 提出物は以下のようなになる。

- ・ ①を選択した場合, ワードファイルとエクセルファイル (デスクトップに保存)
- ・ ②を選択した場合, ワードファイル (デスクトップに保存)
- ・ ③を選択した場合, ワードファイル (デスクトップに保存)
- ・ ④を選択した場合, 解答用紙
- ・ 問題選択調査票 (必須)

- (6) 退出時にシャットダウンやログオフを絶対にしないこと。

推薦入試

- 1 関数 $y = f(x)$ は区間 $[0, 1] = \{x | 0 \leq x \leq 1\}$ 上で定義された連続関数であり, $f(x) \geq 0$ ($0 \leq x \leq 1$) を満たすとする。このとき, x 軸, y 軸, 直線 $x = 1$ および曲線 $y = f(x)$ によって囲まれた図形の面積 S を調べたい。

よく知られているように, S は区間 $[0, 1]$ 上での関数 $f(x)$ の定積分によって与えられる。関数 $f(x)$ に対して, $F'(x) = f(x)$ を満たす関数 $F(x)$ を $f(x)$ の原始関数という。区間 $[0, 1]$ 上での $f(x)$ の定積分とは, 原始関数 $F(x)$ の区間の端点における値の差によって定められる定数である。即ち, S は

$$S = \int_0^1 f(x) dx = F(1) - F(0) \quad (*)$$

と表わすことが出来る。

原始関数 $F(x)$ の表示が得られれば, (*) によって S の表示を得ることが出来るが, 仮に $f(x)$ が初等関数であったとしても, $F(x)$ が初等関数によって表示できるとは限らない。また, $F(x)$ の表示が得られたとしても, S を定量的に解析することは, その表示を得ることとは別の問題である。

S を定量的に見積もる方法として, 以下の手順 (P) を用いた近似値を算出する方法が考えられる。

【 S の近似値を算出する手順 (P)】

- (手順 1) N を正の整数として任意に 1 つとる。
 (手順 2) $\Delta x = 1/N$ で $\Delta x > 0$ を定めて, $n = 0, 1, \dots, N$ に対して $x_n = n\Delta x$ とおく。
 (手順 3) 各小区間 $[x_{n-1}, x_n]$ ($n = 1, 2, \dots, N$) において, 底辺の長さが Δx で高さが $f(x_{n-1})$ である長方形を用意する。
 (手順 4) (手順 3) における長方形の面積 $s_n = f(x_{n-1})\Delta x$ をすべて足し合わせたものを S の近似値として採用する。即ち,

$$S \approx \sum_{n=1}^N s_n = \sum_{n=1}^N f(x_{n-1})\Delta x$$

とする。なお, 事実として $N \rightarrow \infty$ とすると右辺の近似値は S に収束することが知られている。つまり, 基本的には N が大きい方が近似の精度は良くなる

以上を踏まえて, 以下の問に答えよ。なお (2) における近似値の計算には, 表計算ソフト (エクセル) を利用せよ。

問

- (1) $f(x) = e^{-x}$ のとき, S を求めよ。ここで, e は $e = \lim_{h \rightarrow 0} (1+h)^{1/h}$ によって定まる定数であり, 「自然対数の底」または「Napier 数」と呼ばれる。
 (2) $f(x) = e^{-x^2}$ のときにはその原始関数の表示を求めることは出来ない為, 代わりに手順 (P) を用いて近似値を算出する。
 (i) 手順 (P) で $N = 100$ としたときの, S の近似値を算出せよ。
 (ii) S の近似値を算出する方法として手順 (P) よりも精度の良い方法を考案し, その方法について述べよ。
 (iii) (ii) で考案した方法を用いて, S の近似値を算出せよ。

平成 29 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース
推 薦 入 試

2 次の英文を読んで、問 1、問 2 に答えよ。

問 1

When she was thirteen, Heather Lawver read a book that changed her life: *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*. Inspired by reports that J. K. Rowling's novel was getting kids to read, she wanted to do her part to promote literacy. Less than a year later, she launched *The Daily Prophet* (<http://www.dprophet.com>), a Web-based "school newspaper" for the fictional Hogwarts. Today, the publication has a staff of 102 children from all over the world.

Heather has been its managing editor, hiring columnists who covered their own "beats" on a weekly basis. She encourages her staff to closely compare their original submissions with the edited versions and consults with them on issues of style and grammar as needed. Heather initially paid for the site through her allowances until someone suggested opening a post office box where participants could send their contributions.

(Henry Jenkins, *Convergence Culture Where Old and New Media Collide*, New York, 2006 より。
なお一部字句を削除・修正している。)

(1) 下線部を訳せ。

(2) Heather Lawver が始めたプロジェクトを記述せよ。またこのプロジェクトに期待できる成果を説明せよ。

問 2 以下の英文は 1999 年 4 月 27 日付けの *The Daily Yomiuri* に載った人生相談である。この相談に対して、あなたならどうアドバイスするか。50 語以上の英文で書け。最後に語数を () を付けて示すこと。なお、書き出しは

Dear Ms. A:

とする。(この書き出し部は語数にカウントしない。)

Dear Troubleshooter:

I am in my 20s, have been married for five years, but have no children.

My husband and I run a restaurant, which is a pain in the neck because he expects me to share the same kind of preoccupation he has for the business. I know our restaurant means a lot to us, but I am also interested in other things, such as self-improvement.

Whenever I consider taking classes, he tells me not to do anything that doesn't benefit the restaurant. He doesn't approve of the type of books I buy, unless they are either on cooking or better ways of waiting on customers.

I feel like I am being watched 24 hours a day. He opens the restaurant even on days it is scheduled to close. Being unable to go out, I regularly get irritable and stressed out. I feel that I am on the verge of a nervous breakdown. Should I divorce him?

(A, Hiroshima)

3 以下の本文を読んで後の問に答えよ。

小説を読むという行為を考えるにつき、敢えてここで二つの疑問を呈してみることにしよう。一つは、読書の現場において、我々が当対象とする小説というジャンルと、新聞や評論など、他のジャンルの「読み方」との間に、差異はあるのかという疑問。もう一つは、同じ小説を読むに際しても、一般的に受容のみをさしあたっての目的とする、やや受動的な読書と、研究などを目的とし、作品についての批評や解説などの次の段階の言説を用意する場合のような、能動的な読書との間に、差異はあるのかという疑問である。

一点目から考えてみよう。これは、言い換えれば、我々の小説の読みの究極の目的が、どこに向かっているか、という問題でもある。ただ文章を読み、その内容を把握するためだけならば、小説であれ新聞であれ、読み方に違いはないはずである。しかし、果たして事実はそうであろうか。小説を「読む」時、そこには、新聞を「読む」という行為からあふれ出る、またはそれとは明らかに区別される、別の行為が想定されているのではないか。

この疑問は、内容を理解する読書が新聞の読みとすると、小説の読みはそれにとどまらず、もう少し別の要素を持っているのではないか、という見込みから生じる。逆に言えば、もしも書かれたものの内容を読み取る実用性のみが「読む」という行為の唯一の目的ならば、そもそも物語や小説などという虚構は世の中に不要なはずである。なぜなら、そこには読み取っても不毛な「作り事」しか書かれていないからである。

しかしながら、物語や小説は、形を変えながらも、古代より今日まで実に長い間書かれてきたし、読まれてきた。近代以降においても、小説の方がよくわかること、ないし小説にしか描けないことが、この世にはあるのではないかということは容易に想定できる。

例えば病気の苦しみを知らるために医学書を読むことと、その病気で苦しむ患者を描いた小説を読むこととの間に違いがあることは、我々がどこかで自然に感じ取っている事実であろう。それはいったい何か。「感動」であろうか。具体的な再現性の効果であろうか。

この問題は、さらに言えば、小説にとどまらず、絵画や音楽など芸術行為全般に共通する問題とも言える。なぜこの世には非実用的な芸術の諸ジャンルが存在するのか。人はなぜルノワールの絵やモーツァルトの音楽を必要とするのか。あるいは、実は必要ないのか。このことを、ひとまず小説というジャンルの特殊性とは別に探究しなければならない。それは、芸術行為の非目的の性とも呼ぶべき性格である。またそれは、芸術行為が日常行為から切り離されて、その中で、ある自律的運動を行うことでもある。

このことが、読むことが内容を理解するだけにとどまらず、その先を用意しているか否かという問題を提示する。その先とは、一通りの理解の上に、さらに生じる意味があるのかどうか、という問題である。小説の内容をただ読むだけならば、一通りの日本語が分かれば、誰でも読めるはずである。これは日常的な行為の一環である。特別な学習がなくとも、誰も自然にその能力を身につけることは可能であろう。したがって、例えば大学での講読や特殊講義と名づけられるような授業は必要ないはずである。しかしながら、文字を追いかけるだけではわからない何かが書かれていると考えるために、これらの科目が成り立っている。もちろんこれは、各種の文学講座でも同様のことであろう。小説を読むことには、内容理解とは別の、もう少し深遠な意味把握が期待されていることは、想定できるところであろう。ど

うやら我々が行っている読書とは、新聞などを読むように内容を理解するというだけの行為ではないようである。

その根本は、おそらく小説や芸術作品が虚構であることに強く関わっている。本を読む作業の中で、我々は、日常世界とは別の、ある特別な世界に対峙している。我々が読書行為で追い求めるものは、現実世界ではない。確かに小説に書かれる世界は日常世界と似ている。文字で書かれた作品に現れる空間や人々を、あたかも日常世界のそれとして受け入れることはよくあることである。まず、同一視して何ら差し支えはない。しかし、本来それは文字で書かれただけの世界であり、それがこの世のどこかにそっくりそのまま存在している保証はない。このことを、通常読書は敢えて問わないだけの話である。通常読書は、文字で読んだだけの空間を、読者が何気なく現実空間へ置き換えてしまう、そのからくりについて問いかけはしないのである。

二番目の疑問に進もう。通勤通学の電車の中や、のんびりとした日曜日の午後などに行う一般的な読書と、読書感想文を書いたり、文芸評論家が評論を書いたり、大学などで研究論文を書くことを前提として行う、言わば何かを書くための読書行為とは、違っているのか、もし違うのならばどのように違うのかといった問題である。例えば一般的な読書は娯楽として認定されるのに、文学的講読となると、とたんに負担を感じる読者は多いのではないか。

ここに区別される、レクトゥール（一般読者）とリズール（精読者）について、我々が殊更に注意すべきことは、それぞれの読書行為が、同じ小説作品の中でも、どの部分を読んでいるか、という問題である。一般読者は、おそらく内容を中心に読み取ることに楽しみを見出す。それは、多くは筋のことであり、人物造型の妙がこれに次ぐであろう。そして、そのような読書は、筋を読み終わった時に、ほぼ完結する。一方、精読者はそれだけでは満足しないのである。

例えば、夏目漱石の『心』（『東京朝日新聞』『大阪朝日新聞』1914年4月20日～8月11日）は、筋を言うならば、「先生」という人物が、友人のKからある女性への恋愛を打ち明けられていながら、この友を裏切り、その女性と結婚し、Kは自殺するが、今度はそのことを述べた自らの遺書を、語り手である「私」に残して逝ってしまうという話である。しかし、このような筋を読み取ることだけが、『心』を読む行為ではない。そこには、書かれていない重要な要素が、いくつか想像される。例えば、この小説のタイトルは、新聞連載の際には、「心」と漢字表記であった。同年9月20日に、岩波書店から単行本として刊行された際に、箱などには漢字のまま書かれていたが、表紙の背に「こゝろ」、本文の初めと終わりに「こころ」とひらがなの表記が採用された。その変更には何か意味があるのか。このことは、我々の想像や探究に委ねられている。また、内容についても、例えば明治の精神と作中人物たちとの、言わば父権重視のものとややホモ・セクシャルな関係や、時代の病の伝染の問題など、さまざまな、直接的ではないが可能性の高い、隠された「意味」を想定することは容易である。これらを読み取ろうとするのが、精読者たる読者である。もちろん、書かれていないのであるから、どこまでいっても不確定ではあるが、発表当時の読者を想像すれば、今よりもっと何かがわかっていたのではないか、という想像も可能である。また、不確定な要素を埋めるために、言外の意や行間の意を読もうとする想像力の駆使の勧誘もまた、作品の一部と捉えれば、受動的に読書することだけにとどまることが、純粋な作品受容としては不十分という考え方も可能なのである。

その際に駆使されるべき読者の想像力こそ、読書行為について最も重要な要素と考えられることは言うまでもない。テキストとしての小説は、あくまで、読みの方向を指示する、言わばきっかけまでが書かれているだけのものであり、そこに読者が参加し、テキストの空白を埋めてこそ、テキストは現実化される。この読者の能動性は、言い換えれば、読者の作者性、というやや逆説的な性格を帯びたものである。この時読者は、言わばテキスト生成に参加していることになり、その自覚が、読書行為を極めて積極的なものとする。想像力を駆使し、テキスト生成に参入することにより、読者自身もまた、新たな生を発見する。これが、読書行為の一つの究極の意義ではなからうか。

想像力は、現実的には限界がある我々の世界を、限りなく広げることが可能にする。非現実世界の構築を可能とすること、これにより、想像力の広がりを生むこと、これが小説の存在意義のおそらく最も大きな機能である。

我々の精読とは、従来そのようにふるまってきたような、テキスト自体の意味の忠実な再現というような行為ではなく、むしろ、再現や注釈に見せかけた、書かれていないものの創出、ないし虚構行為なのではないか。我々読者は、精読するふりをして、創作にいそしんでいるのではないか。もしそうなら、そのような行為が、何をもって許され、何を理由に存在意義を持つのかは、もう一度問い直されるべきではなからうか。

そして、その時に改めて、小説が芸術の一つであることが認定されるに到るであろう。芸術とは、言うまでもなく、実用性の有無の議論を超越する。「心を豊かにするために芸術を鑑賞する」、あるいは「息抜きのために小説を読む」などという言葉があるが、これらの言葉も厳密に言えば実用化に向かっている。つまり、日常生活が主たるものとしてまずあり、その補助的な意味に芸術が捉えられているからである。そのような日常性を前提とするところに、おそらく芸術の存在価値は向いていない。芸術とは、根本的に、非現実的な、非日常的な場所を志向する。したがって、現実や日常の価値観を、できる限り持ち込まずに、これを判断すべきなのである。

(本文は真銅正宏『小説の方法』萌書房による。なお、一部字句を削除・修正している。)

問

- (1) 本文の主張を100字以内で要約せよ。
- (2) あなたの読書経験を踏まえ、小説に限らずフィクションや芸術の存在意義について、あなたの考えを800字以内で論述せよ。

平成 29 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース
推 薦 入 試

4

解答用紙 4 にある「部品」を組み合わせたリ、レイアウトを工夫したりして「はじめ」の図形または絵を作り、そこから「おわり」の図形までを連続した 10 以上のイメージでつなげよ。ただし「はじめ」と「おわり」はイメージ数に含まない。

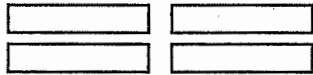
つながりは「意味的」「視覚的」あるいはその両方によるものとし、つながりが明確になるよう矢印や文章を用いて補足してもよい。

小論文解答用紙

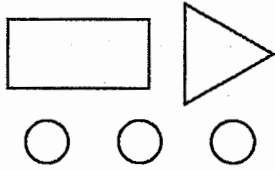
受験番号

--	--	--	--	--	--	--	--

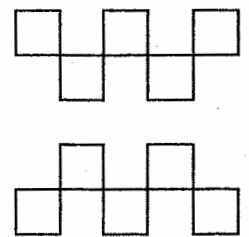
4



部品



はじめ



おわり

平成 29 年度 人間発達科学部 人間環境システム学科
人間情報コミュニケーションコース
推 薦 入 試

問題選択調査票

受験番号

--	--	--	--	--	--	--	--

選択した問題に○印を記入しなさい。

1	
2	
3	
4	

下書き用紙